伊勢物語

特別
へ 12
4548

むかしおとこうゐかうふりしてならの京
かすかのさとにしるよしゝてかりにいにけり
そのさとにいとなまめいたる女はら
からすみけりこのおとこかいま見てけり
おもほえすふるさとにいとはしたなくて
ありけれはこゝちまとひにけり
このおとこのきたりけるかりきぬのすそを
きりてうたを書てやるそのおとこ
しのふすりのかりきぬをなむきたりける

新古
春日野のわかむらさきのすり衣
しのふのみたれかきりしられす
となむおいつきていひやりけるついて
おもしろきことゝもや思ひけむ

古今
みちのくのしのふもちすりたれ故に
みたれそめにし我ならなくに
といふ哥のこゝろはへなりむかし人はかくいちはやき

やきみやひをなむしける

むかしおとこありけりならの京ははなれ
この京は人のいへまたさたまらさりける
時ににしの京に女ありけりその女世人
にはまされりけりその人かたちよりは
心なむまさりたりけるひとりのみもあら
さりけらしそれをかのまめおとこうち
ものかたらひてかへりきていかゝ思
ひけむやよひのついたち雨そほふるに
やりける

古今
おきもせすねもせてよるをあかしては
はるの物とてなかめくらしつ

昔おとこありけりけさうしける女のもとに
ひしきもといふ物をやるとて
おもひあらはむくらの宿にねもしなん
ひしきものには袖をしつゝも

二条のきさいのまたみかとにもつかうま
つりたまはてたゝ人にておはしましける
時のこと也

むかしひんかしの五条に大きさいの宮
おはしましける西のたいにすむ人あ
りけりそれをほいにはあらて心さし
ふかゝりける人ゆきとふらひけるを正月の
十日はかりのほとにほかにかくれにけり
ありところはきけと人のいきかよふへき
所にもあらさりけれはなをうしとおもひ
つゝなんありける又のとしの正月に
むめの花さかりにこそをこひていきて
たちてみゐてみゝれとこそに似へく
もあらすうちなきてあはらなるいた
しきに月のかたふくまてふせりてこ
そをおもひいてゝよめる

古今

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ
わか身ひとつはもとの身にして

とよみてよのほの〳〵とあくるになく〳〵
かへりにけり

むかしおとこ有けりひんかしの五条わたりに
いとしのひていきけりみそかなる
所なれはかとよりもえいらてわらはへの
ふみあけたるついひちのくつれより
かよひけり人しけくもあらねとたひかさ
なりけれはあるしきゝつけてそのかよ
ひちによことに人をすゑてまもらせ
けれはいけともえあはてかへりけりさて
よめる

同

人しれぬわかかよひちのせきもりは
よひ〳〵ことにうちもねなゝむ

とよめりけれはいといたう心やみける

しゆしてなり二条のきさいにしのひ
てまいりけるを世のきこえありけれは
せうとたちのまもらせたまひけるとそ
昔おとこ有けり女のえうましかりける
をとしをへてよはひわたりけるをから
うしてぬすみいてていとくらきにきけ
りあくた川といふ河をゐていきけれ
は草のうへにをきたりける露をとか

れはなにそとなむおとこにとひける行
さきおほく夜もふけにけれはおに
ある所ともしらて神さへいといみしう
なり雨もいたうふりけれはあはらなる
くらに女をはおくにおし入ておとこ弓
やなくひをおひてとくちにをりはや
夜もあけなむと思ひつゝゐたりける
におにはやひとくちにくひてけり

といひけれと神なるさはきにえきかさり
けりやう〳〵夜もあけゆくにみれはゐ
てこし女もなしあしすりをしてなけ
ともかひなし

秋吉
白玉かなにそと人のとひしとき
つゆとこたへてきえなまし物を
高子 元慶元年正月為中宮卅六
これは二条のきさきのいとこの女御
の御もとにつかうまつるやうにてゐ給へ
りけるをかたちのいとめてたくおはし
けれはぬすみておひていてたりける
を御せうとほり川のおとゝたらう 昭宣公
くにつねの大納言またけらうにて内へ
まいり給ふにいみしうなく人あるを
きゝつけてとゝめてとりかへし給う
てけりそれをかくおにとはいふなり
けりまたいとわかうてきさきのたゝにおはし

なしつるはしるや
むかしおとこありけり京にありわひて
あつまにいきけるに伊勢おはりの
あはひのうみつらをゆくになみのいとしろく
たつをみて
後撰
いとゝしくすきゆくかたのこひしきに
うらやましくもかへるなみかな
となむよめりける

むかしおとこ有けり京やすみうかりけむ
あつまのかたにゆきてすみ所もとむ
とてともとする人ひとりふたりして
ゆきけりしなのゝ国あさまのたけに
けふりのたつを見て
新古
しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人のみやはとかめぬ
むかしおとこありけりそのおとこ

こゝにたま袖をぬらしけるて京にハ行
らしかつらの方にすむつきさそはれて
かゝるそゆきそわりしかになりける
人のひかりをまつくいきそならて
われ人をまたゆへいはれそのうへ
なかにやなりとつゝ西行にて
そこは名川としこゝいかるを水ゆく
川のくまそゐら捨たはしをや川やゑ

住よしそまた名つくしこゝいふる
からさいのほとりまのけしきなる
てうきいいくむそうそのさうにかき
ほとさいてたりくいゝさゆりされと
みてある人のいてゝきつてこゝにいぬ
出けりとくらなふみすくそていのさと
しるへのうひそれいふあな

古今 弟子夜きゝてはられわつきぬれハ

よろしきやうなれどもせぬ曲
こゝろ并ことばは人の生より
法なとくやすきはまゝあり
持きくぞするかのなにてあるなり
のふ守ありてあるべきするなり
いとかくもはうさふのまえぞ
あかものゝはうくにするめとよ
詠とさおもふすべき歌あるはみわかゝ詠

それはそのつまりるこゝ肝要とこれにて
又人かりかさまやの人のあやまち
まことあるかきぞりなく
よ河のあする川の山嵐ぞ流るゝ

秋六
小あらしも人かりあかぬ紅葉
峰の山と見えはさ月のつてゆきよ

月
雪つもりてあかり
時しらぬやまのふじのねつもるか

かのこまたらに雪のふるらむ
その山はこゝにたとへはひえの山を
はたちはかりかさねあけたらんほとに
して なりはしほしりのやうになんありける
或説云塩ニ尻ト云物アリ其尻似此山此物故ニ習故好早詞家蓮殊作用此説
先人命此説為塩尻ト云又んハ早也不可用之仙エ又上手アリナシ往年有ヨ尋問人答此様不知也し
なをゆき〳〵てむさしのくにとしもつふ
さのくにとの中にいとおほき
なる河あり それをすみた河といふ
その河のほとりにむれゐておもひ
やれは かきりなくとをくもきにけるかな
とわひあへるに わたしもり はや舟に
のれ日もくれぬといふに のりてわたらん
とするに みな人ものわひしくて 京に
思ふ人なきにしもあらす さる折しも
白き鳥の はしとあしとあかき しき
の大きさなる 水のうへにあそひつゝ
いををくふ 京には見えぬ鳥なれは

人からすまよしもやましといへれはいふ程
もむかしのこともわすれぬときこえ
君おもひおもひつゝこそはしらぬ鳥
ますなく人のかへりやすらめとこよ
めりけれはあはれにおもひてなけきまさり
むかしわすれぬむかしのことまつきこえけれは
思ふさまにかはりてあるよ
ひさしくていことへ人はけにむかしてい

むかしとてすみあそひたりけるにまつりにつけさ
りけるをはいつ人をそけるすみなから
よるもありさりけてそこはかなく人を
おもひいるこのむかしおもひこえ給
ありけるすむよりて思ふ此のこはさ
よみ侍りける歌
君よりつゝ世のひとをわすれぬる
きこえの方にうつるはなさく

むこかねの返し

わかかたによるとなくなるみよしのゝ
たのむのかりをいつかわすれん
となむ人のくにゝても猶かゝる事
なんやまさりける

むかしおとこあつまへゆきけるに
ともたちともにみちよりいひおこせける

拾遺 わするなよほとは雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて

昔おとこ有けり人のむすめをぬすみ
て武蔵野へゐてゆくほとにぬす人
なりけれはくにのかみにからめられにけり
女をはくさむらの中におきてにけにけり
みちくる人この野はぬす人あなり
とて火つけむとす女わひて

古今 カスカノ むさしのはけふはなやきそわかくさの

つまもこもれり我もこもれり
とよみけるをききて女をはとりてともにゐて
いにけり
昔武蔵なる男京なる女のもとに
きこゆれははつかしきこえねはくるしと
かきてうはかきにむさしあふみとかきて
をこせてのちをともせすなりにけれは
京より女

むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし
とあるをみてなむたへかたき心ちしける
とへはいふとはねはうらむむさしあふみ
かゝるおりにや人はしぬらむ
むかしおとこみちのくにゝすゝろにゆき
いたりにけりそこなる女京の人はめつらか
にやおほえけむせちにおもへる心なむ

ありけるさて、かの女

なかく二人トナラズハ蚕ニモナラマシ物ヲ玉ノヲバカリ

なかなかにこひにしなずはくはこにそ
なるべかりける玉のをばかり　蚕也
うたさへそひなびたりける。さすがにあはれ
とや思ひけん、いきてねにけり。夜
ふかくいでにければ女

よもあけばきつにはめなでくたかけの
まだきになきてせなをやりつる
東国之羽家ノクタカケト云　家鶏也
万葉云クタかけのみれ

といへるに、男、京へなんまかるとて

くりはらのあねはの松の人ならば　クリ一本
みやこのつとにいざといはましを
といへりければ、よろこぼひて、おもひけらし
とぞいひをりける

むかしみちのくにゝてなでうことなき人
のめにかよひけるに、あやしうさやう
にてあるべき女ともあらずみえければ

吉野山出てハからよみちの形
人の心のおくてなく
ゆきうりをもとて身をとゝおもへとさ
随さるをきこえひす也とそいつくに
世をもえ
むかしさかありつ移はていま人あり
かへみよのえうそまたさうつりて時
まかひかれとのちハ世かけりけるわ

ふかれた世の移の人代ともわすまへ
かハるらうしてあそけりけるとも
こちえてとまへ人よしなくまやしく庭
なもおもむしよろしくはのこゝろ世の
移のとまあす寺うちあひ道
きるやしくこゝろなれそつかあま
おもりてあ移の院さみちそまりける
事へゆるをおとこ風とふむかはしこさ

来年と立りぬれハ心さしふかゝりし
わかれし思ひしとまつ忘れハつれなく
何とはりなりてものて猶人の心は
あひかたくむつかしき事ちかひおもふか
ならひいかにかはとて我かもとより
いはりめるちきりをそへてつてよと
にきそれくなり
てをおりてあひまくとかく過ハ

こゝをといひつゝらいなかたり
かハらすもちこゝろとそいひてわかれ
こゝろひくるの掛まれとありて行
年毎にはこそとてらハてある
つらいたとゆきさめん
くいなりされは
これやはあさのく夜むつれ
君かみそと毎てありけれ

よろこびにあへる人又
枯たるにもやさしくおもはれ
あるはことの物にそ有る
こゝろにうき事にあへる人のはなれ
盛にかきてうりそれはあはれ
わかれなとにむかひてはなれし花
古今
こゝに春よめる人を結ひり
なし

同
寛平の御時きさいの宮の哥合によめる
きさきの宮有るとき
むかしまきあるむあるおありけれはなとちら
けりかせさしし人をりそれはん心
ことそれきてわれのゝ人面とお
まれなとのりく居る
人はあまに白くはそいけり白雲に
こえてはこそとまありまこさを

おとこしらすよみによみける
くれなゐにゝほふか上のしら菊は
おりける人の袖かとも見ゆ
むかし男宮つかへしける女のかたに
こたちなりける人をあひしりたりける
ほともなくかれにけりおなし所なれは
女のめには見ゆる物からおとこは
あるものかとも思ひたらす女

古今
あま雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめには見ゆる物から
とよめりけれはおとこ返し
同 ユキヒラ
ゆきかへりそらにのみしてふる事は
我ゐる山の風はやみ也
とよめりけるは又おとこある人となん
いひける
むかしおとこやまとにある女をみてよは

ひそかにひまなき涙そかゝるくもつらく
まつ人のかりそめなれしのとかなるみちもなや
こひわたるそのゆかりのみちものいと
ねかひきとつくえもののおほちのち
おもひ候

君のなさけをおもふ故は長き夜
くこ路も秋のゆきちりてまきれし
それかりけれときしも女まいる京まきさり

こそうらむかしりてききたりける
はかりのやまよりつかうまつりしわかれん
君か代とよはひの長くなかれし
ゆくしおとこ女つゐにして国にて
あり心かわりわかれの涙をいそかる事か
ありなからいはれぬかなしさよおもひて
よのなかをうらみつゝはてぬそのいのちを
おもひてのはかなさをうらみてもなを

かきつはた

いつはりとしりなからもやせん

世のわりさ海人なら神は

こゝろをくれいてつゆそわこの世の

くつきとさそふをまちいたく

つきてこそおもひなさそれはか

とらしもていてまつれいてさこそ

かゆへしてゆふいてゝことそよし見

みなせ川ありてゆく水なくはこそ

つひにわか身をたえぬとおもはめ

おもひかけぬ世の中をいつかはと

わすれてもわかやすからし

こひしくはたつねてもみよ

人ハイカニ思ヒヤルトモ我ガツラクカナシミヲ云ツクスベクモナシトナリ

人をつらしとおもひやすらんそらこ

わかみのつきにみ人めをしく

こゝろをひとしくありてかへりまた

てふやありぬべきをひとつせなる
いさかひたまひて葵の上をはなれ
人のいひけりけるをすれ
返し
手習草子てさゝえゆけは
おもひいつりこは声に○
みなわりかわきもいひつてなと
哉六　いかなる源氏に見えしのこそひふ

わかしりけれ物うつろふ○哉
みて
同
たゝ見よそへあるる雲井かなしく
身のなかはにて如くなるれ
こいひくれとのこゝにたりふけ
時めくくわりふかき
むかしにもてきて春たて枝
手をとりて女のもとへ

うきなから人をはえしもわすれねは
新六
かつうらみつゝなをそこひしき
といへりけれはされはよといひておとこ
あひみてはこゝろひとつをかはしまの
水のなかれてたえしとそ思ふ
とはいひけれとその夜いにけりいにしへ
ゆくさきのことゝもなといひて
秋の夜のちよを一夜になすらへて
やちよしねはやあく時のあらん
返し
秋の夜のちよを一夜になせりとも
ことはのこりてとりやなきなん
いにしへよりもあはれにてなんかよひける
むかしゐなかわたらひしける人の子とも
ゐのもとにいてゝあそひけるをおとな
になりにけれはおとこも女もはちかはして

しておりけれとおとこはこの女をこそ
えめとおもふ女はこのおとこをと思ひつゝ
おやのあはすれともきかてなんあ
りけるさてこのとなりのおとこのもとより
かくなん
つゝ井つのゐつゝにかけしまろかたけ
すきにけらしないもみさるまに
女返し

くらへこしふりわけかみもかたすきぬ
君ならすしてたれかあくへき
なといひ〳〵てつゐにほいのことくあひにけり
さてとしころふるほとに女おやな
くなりたよりなくなるまゝにもろともに
いふかひなくてあらんやはとてかうちの国
たかやすのこほりにいきかよふ所いてき
にけりさりけれとこのもとの女

ありてかゝるにやあらんと思ひ
うたがひて前栽の中にかくれ
ゐて河内へいぬるかほにて
見ればこの女いとようけさうじ
てうちながめて

古今
風ふけばおきつしら浪たつた山
よはにや君がひとりこゆらん
とよみけるをきゝて限りなく

かなしと思ひてかうちへもいかず
なりにけりまれ〳〵かのたかやすにきて見れ
ばはじめこそ心にくゝもつくりけれいま
はうちとけて手づからいひかひとりて
けこのうつはものにもりけるを見て
こゝろうがりていかずなりにけりさりけれ
ばかの女やまとの方を見やりて

新古
君があたり見つゝををらんいこま山

といひて見いたすにからう
してやまと
人こむといへりよろこひてまつにたひ〳〵
すきぬれは
きみこむといひしよことにすきぬれは
たのまぬものゝこひつゝそふる
といひけれとおとこすますなりにけり
むかしおとこかたゐなかにすみけり男宮
つかへしにとて別おしみてゆきける
まゝに三とせこさりけれはまちわひ
たりけるにいとねむころにいひける
人にこよひあはむとちきりたりけるに
このおとこきたりけりこのとあけ
たまへとたゝきけれとあけてうたを
なむよみていたしたりける
あらたまのとしの三とせをまちわひて

たゝこよひこそにゐまくらすれ
といひいたしたりけれは
あつさゆみまゆみつきゆみとしをへて
わかせしかことうるはしみせよ
いひていなむとしけれは女
あつさゆみひけとひかねとむかしより
心はきみによりにし物を
といひけれとおとこかへりにけり女いとかな
しくてしりにたちておひゆけとえ
おひつかてし水のある所にふしにけり
そこなりけるいはにおよひのちして
かきつけゝる
あひおもはてかるゝ人をとゝめかね
わかみは今そきえはてぬめる
とかきてそこにいたつらになりにけり
むかしおとこありけりあはしともい

さりける女のさすかなりけるかもと
にいひやりける
秋の野にさゝわけし朝の袖よりも
古今　あはてこし夜そひちまさりける
色このみなる女返し
同　みるめなき我身をうらとしらねはや
小町　かれなてあまのあしたゆくくる
むかしおとこ五条わたりなりける女を
えすなりにけることゝわひたりける人
の返ことに
おもほえす袖にみなとのさはくかな
新古　もろこし舟のよりしはかりに
むかしおとこ女のもとに一夜いきて又も
いかすなりにけれは女の手あらふ所にぬ
きすをうちやりてたらひのかけにみ
えけるをみつから

我許物思人は又もあらしと
おもへは水のしたにも有けれ
ゆふくれとかへりける女のもとへまかりて
きゝて

水のおもにおちやかゝる花の色さへ
ときはなるさくらをそれのみならく
むかし文のこたりある女につかはしける
よみ人

なきさくれてさよふけにけるのち
水のかゝりてはしらしとこそ
貞観十一年二月貞明親王為皇太子于時高子従三位女御後春宮母儀
そのかみ春宮の御息所ときこえける時
号歌
まめしあけてまゐりたまへりけるに
花のいろはあはれなりけりこゝろにて
今日のこゝろはかはるらし
新六
昔ならひたりける女のもとに
やことなき人にてはへりけれは

つらき心のなかくみゆらむ
むかし宮のうちにてあるこたちのつほね
のまへをわたりけるになにのあたにか
おもひけむよしや草葉よならむさか
みむといふ男

つみもなき人をうけへはわすれ草
おのかうへにそおふといふなる

といふをねたむ女もありけり

むかしものいひける女にとしころありて
古今に
いにしへのしつのをたまきくりかへし
読人不知
むかしを今になすよしもかな
といへりけれとなにともおもはすやあり
けむ
むかし男津のくにむはらのこほりに
かよひける女このたひいきては又はこし
と思へるけしきなれはおとこ

上句 あしたにはかたいの宗おちやまには
万葉 君か心はわれをひきのみ
せし
忠なる法にむかしは中と心とつれてかた
舟にかかれのまことにてきさき
年人のつとめいいやかはや
昔からとつきみより守る人のあふ
いにしへ夢にはいよねいむ福まさるれは

いさうきかをくわの非
おきなそていふいはれをし
むかしいにしへわすれてさらら人の訴よ
むかしそあらそふまうちぬ金
そのそのほかあらせ国
せうしよ本あるまりほとひとなか
せのみえり
無世つきす福まさるすなもかう

えむと人にわかおもはなくに

むかしおとこいろこのみなりける女
にあへりけりうしろめたくや思ひ
けむ

我ならて下ひもとくなあさかほの
ゆふかけまたぬ花にはありとも

返し

ふたりしてむすひしひもをひとりして
あひみるまてはとかしとそ思

むかし紀のありつねかりいきたるに
ありきてをそくきけるによみてやり
ける

君によりおもひならひぬ世中の
人はこれをや恋といふらん

返し

ならはねは世の人ことになにをかも
こひとはいふととひしわれしも

むかしさいゐんのみかと（西院淳和天皇）ゝ申すみかとおはしましけ
りそのみかとのみこたかいこと申す
（崇子内親王母橘船子正四上清野女）
いまそかりけりそのみこうせ給ひて（嘉祥二年五月十五日薨）
おほんはふりの夜その宮のとなり
なる男御はふり見むとて女くるま
にあひのりていてたりけりいと久しう
ゐていてたてまつらすうちなきて
やみぬへかりけるあひたにあめのしたのいろこ
のみ源のいたるといふ人これもものを
みるにこの車を女車と見てよりきて
とかくなまめくあひたにかのいたるほたる
をとりて女の車にいれたりけるを
くるまなりける人このほたるのともす
火にやみゆらむともしけちなむすると
てのれるをとこのよめる
いてゝいなはかきりなるへみともしけち

うらみかはの水にうくあはときえけ
かへりぬる也
いまはなれゆくうきこゝろすみ絶
きゆる地とも我ハたのまれ
あはれさのまことのほとのこゝろハ見を
うけり菊なり
いつるハ千とせはかなき世のはかなき
いしよきかなしくわか身を

おもかはりの告子するかおもハりて思むれ
ゆくへこの世をはかへとひあむと
おもはよりてつきをやらすへの
こゝろほい（まさ）つきとひたまふこれハそ
せるいきおひたくゆめいるを挽
すみふちえけれるひたまくちひ
あやまりよ風さるふたまおやこの
せとひらかとちのあるとうと

とゝむるよしなしゐていてゝいぬ
おとこなくなくよめる
いてゝいなはたれかわかれのかたからん
ありしにまさるけふはかなしも
とよみてたえいりにけりおやあはてに
けりなをおもひてこそいひしかいとかく
しもあらしとおもふにしんしちに
たえいりにけれはまとひて願たてけり
けふのいりあひはかりにたえいりて
又の日のいぬのときはかりになんから
うしていきいてたりけるむかしのわか
人はさるすけるものおもひをなむ
しけるいまのおきなまさにしなむや
昔女はらからふたりありけりひとりは
いやしきおとこのまつしきひとりは
あてなるおとこもちたりけりいや

されとも自ら手なれつことゝもふかく
ゆきぬをあらひて手つからけりわん
さしたへてそれとはるゝいやしきさき
ことなうつはりけれたる人のさかぬさ
とかくなりてそれわせんとすなて
おもたりさよそききそれこれとかのあそ
なかれこときえいとへいらかりぬれ
さいときうけるかはりのくれ

こそぬとみつてとなりけれ
古今 むかしはこの世にきけいめりけるよ
ゆかなるまますかものさりける
むさしのへいたるへし
あしれとこのそとかくをあ
ひいてそれさりてるてはしめ
それむくいをたれてたつとし
わかくはりそそいそけはとこある

まじかりけりなほはたえあらざりけるなか
なりければふつかみかばかりさはることありて
えいかでかくなむ
いでゝこしあとだにいまだかはらじを
たがかよひぢと今はなるらん
むかしかやのみこと申すみこおはしましけり
賀陽親王 桓武第七 母夫人多治比氏 三品治部卿 貞観十三年十月八日薨七十八
そのみこ女をおぼしめしていとかしこう
めぐみつかうたまひけるを人なまめきて
ありけるをわれのみと思ひけるをまた
人きゝつけてふみやるほとゝぎすの
かたをかきてほとゝぎすながなくさとの
あまたあればなほうとまれぬ思ふものから
といへりこの女けしきをとりて
名のみたつしでのたをさはけさぞなく
いほりあまたとうとまれぬれば
時はさ月になむありける

いほりあまたとうとまれぬれは
ときはさ月になむありけるおとこかへし
　いほりおほきしてのたをさはなほたのむ
　わかすむさとにこゑしたえすは
むかしあかたへゆく人にむまのはなむけ
せんとてよひてうとき人にしあらさり
けれはいゑとうしさかつきさゝせて
女のさうそくかつけむとすあるしの
おとこうたよみてものこしにゆひつけ
さす
　いてゝゆくきみかためにとぬきつれは
　我さへもなくなりぬへきかな
このうたはあるかなかにおもしろけれは
心とゝめてよますはらにあちはひて
むかしおとこありけり人のむすめの
かしつくいかてこのおとこにものいは

むかしおひなかりつゝそんとこそや
ありけるものゝやまとにすみけるさ
かはらくりかへしひとつをお
やきさみけくえてつねにありなれた
にひきてありきれて声をほにあけ
たまてとおもひあかりける月
のてありてかつさのとひはね
とあらひとりて秋かけて后すし

き風にさそはれはるかにひある
こゑはるかにきこえけりて

後撰

ねくやうの雲のうへまてなくなくは
あき風にたくへりけれは
声さきたゝぬひとつきぬは
なれしとまたく物そのみ
むかしおとこのもとにありける
さけはしおひいふおとこと人の国へ

いき老とてしわすれしおもひてけち
猶よろつ月日過て老を忘ぬ物をよ
わきまへしく思ひいふしせて月日
のつもるをおもひて年重やしこまひけ（よ）
むしてく昔よしいて見むねよの中
の人のいにしへをしのふ事ハ高きいやしき
よわめれていつされはまそやる
ゆるまを折はそまよ高く

時しあれハ花もけふら
むかしおもとおりふしにつけて思ふる
世ありそめしこのおりふしとおもされ
里にいきそつまつきおもひさちりつゝ音

哀

袖なさのひくそいまさむなき事ハ
かすかなる夢とうちなきれ
世しハおもとて

月

御法なきと思ひなるにかれ何事にて

つゐによる瀬ハありてふ物を

八 むかし男有けりむまのはなむけせむと

て人をまちけるにこさりけれは

いまそしるくるしき物と人またむ

本 さとをはかれすとふへかりけり

むかしおとこいもうとのいとおかしけなりけるを

見をりてとて

うらわかみねよけにみゆる若草を

人のむすはむことをしそ思ふ

ときこえけり返し

はつ草のなとめつらしきことのはそ

うらなく物を思ひける哉

むかし男ありけりうらむる人を恨て

とりのこをとをつゝとをはかさぬとも

おもはぬ人をおもふものかは

あさつゆはきえのこりても

朝露ハきえのこりてもありぬべし
誰かこの世をたのみはつべき

又おとこ
吹風にこぞの桜ハちらずとも
あなたのみがた人の心ハ

又女の返し
古今
行水にかずかくよりもはかなきハ
定家首
おもはぬ人をおもふ也けり

又おとこ
ゆく水と過るよはひとちる花と
いづれまてゝふことをきくらん
あだくらべかたみにしけるおとこ女の
しのびありきしけることなるべし
むかしおとこ人のせんざいにきくうへけ
るに
古今
うゑしうゑバ秋なき時やさかざらん

花うちちるみ稲は今をさかりや
むかしおとこ有けり人のいとしわかさ
つまちまさとこゑせられけるによまよ
ねやのうち君はねぬれにけれはよめる
我古野まつそてぬるるひき
とききてしとまむ宿りける
むかしおとこあひさきちまあひて
まつらみ衣するはしは鳥のふ

のたまさかれて
いつそかはこふのまちむ人会ひて
なりふしそまさ来かひさま
着物とつまをまゐりけるむすめに合
返事に
ゆきやらぬ身ちとたける稲は六
わさ田そなる露やそとん
むかしおとこ身けらせの海

りなそへつよふ
おきゝ手ハあらすまめとたとしの
野り晦てくまのなまるまし
むかしおとこ悔てはりいかすて吾
なつひけりて
我こそハ藁ないはりよする禰宜
らうそく天露の底に姒字
むかしおとこ人金を抱かりけり

はなたまさく人のゆゑあり
恋ひぬあまのかるもにやとるてふ
われから身をもてきつるかな
むかしいつそのころこかよなかをかに
りとゝいふ所に家つくりてをり
そのとなりのこそり昨家けるよ
ことなき女とものゐ中なりけれは
田からむとてこのおとこのあるを見て

いそしのすまゐもおほく事なやこそあつ
まりてありきけれはこのわたりにすみけれ
おもしろかりけれはすみはしめし女
わ拝ふかりけるまて代の宿ふ
春 すまむ人の音つれもせぬ まや
こゝいてこの舟はあつまり来かて
わりされやはたとこ
むつましてみるやとめかわたさは

りかいおほのすくすりそわ
それをいかし見り昔こらそをそ
かゝらえむしていゝ拝し
からはひておらかいゝ子すきさうさ
まわる毎つはゆかまのしものと せい
むかしおとこ宮といつておもひ志ひん
つふ山はすさむしおもひつそ
後撰 すまひあ今はかきりとや海ちては

身をかくすへき宿もとめてん
かくてものいたくやみて死に入たりけれは
おもてにみつそゝきなとして
いきいてゝ
古今 わかうへに露そをくなる天の河
宛者 とわたる舟のかいのしつくか
こといひていきいてたりける
むかしおとこありけり宮つかへいそか
しく心もまめならさりけるほとの家
とうしまめに思はんといふ人につきて
人の国へいにけりこの男宇佐の使
にていきけるにある国の祗承の官
人のめにてなむあるとききて女あるしに
かはらけとらせよさらすはのましといひ
けれはかはらけとりていたしたりけるに
さかななりけるたちはなをとりて

古今　さ月まつ花たちはなのかをかけは
家持　むかしの人の袖のかそする
こゝひろふあうたゝひいてわさまれ
ほそ山にはりてそかはり平隆
むかしおとこはまてきゝける
まされたるこのよいふすきぬ
すれはわかれる人のひろくとさて
拾遺　なかれともかへらし人のいそかれ

ぬかすそそふかくぬるらん
昔し
後撰　花しおもひおこしに直きたれしまゝ
なきものゝねをきゝなきけるをいゑ
昔こゝろをつきにけりなりけりけり
こゝやかしこりなかむき人のをは
つきし人の国なりける人はつかれ
わかれし人のまへはいそきそねく

なをさしくわはけるこのありつる人々
まんとおもふよりひきれいとなく分わ
たとこまもとさきるやうにて
いにしへの色香はさらに花
こそあるらめことたりもうら成
こい梅をひてたつふ事なおもひて江
せそねるとまいてせぬといふ事
なきこのこゝろをよめる大年物しい

諸子こい梅
こよひのまよひもあらぬ君を見むと
としの月ゆめはたちかはり見ん
とひてきあかされさたる江家をはまを
ふ年はかりいつかやふむ事の年
むかし世はけるおつそれはけわふむ
わとにおもひそしる事わたちならひ
そん年におもさし梅とうちみちか

をす子三人をよひてかたりけり
ふたりの子ハなさけなくいらへてやみぬ
三郎なりける子なむよき御男そいてこむと
いひあはするにこの女けしきハ
いとよしこと人ハいとなさけなしいか
てこの在五中将にあはせてしかなと
おもふ心ありかりしありきけるにいき
あひて道にてむまのくちをとりて
かう〳〵なむおもふといひけれはあはれ
かりてきてねにけりさてのちおとこ
見えさりけれハ女おとこの家にいき
てかいま見けるをおとこほのかに見て
もゝとせに一とせたらぬつくもかみ
我をこふらしおもかけにみゆ
とていてたつけしきを見てむはらからたちに
かゝりて家にきてうちふせり

ねとこの女のせてやう土のひて人々
ありえみきハ女ちけさそねとそ
ち
猿席り衣行数と承ちや
冬いきへかあそのと拾人
こと見ゑるとねとこにたれと覚えちの
飛ハ拾ふさね芋のまこつとそてねふ
とをハねりしおきてねとは旦てあちろ
残この人まはせてと呂とあれて字

ちかみせあいえむあり宇治
むかしやおこ女乃うかたて柳をま
せよりそれハ陪くたりて宇治あや
けるりまあ治
此風よりあくとすきハ玉すまれ
いさりとふつゝいりへさしるこ
女し
芦りかめぬ風より有とて女ふ簾

たかゆるさはかひまもとむへき
むかしおほやけおほしてつかうたまふ女
の色ゆるされたるありけり大御やす
所とていまそかりけるいとこなりけり
てん上にさふらひける在原なりける
男のまたいとわかゝりけるをこの
女あひしりたりけり男女かたゆるさ
れたりけれは女のある所にきてむかひ
をりけれは女いとかたはなり身もほろひなむ
かくなせそといひけれは
思ふにはしのふることそまけにける
あふにしかへはさもあらはあれ
といひてさうしにおり給へれはれいの
この御さうしには人のみるをもしらて
のほりゐけれはこの女思ひわひてさとへ
ゆくされはなにのよきことゝおもひて

いきつしひきれたかみ人〳〵こそいつはけ
ますはとめそこおもてつきの中まへり
ちそれをうけいまそつはりぬく
そけよし侍くわりやるふ万もいさう
猶またりぬ一それはこつかまかろひか人
しこそけにおもとこつりませ给をまかふ
心やめ每まへとは宇釈本やまれ
おもたりよのをおはつてなまりはく

おもしりのをおは是宇れいとんやうし
みんなさしてしせさとい御とく
わつてくる每とい君あるけくゐる国
まいてものなてとろ子さ侍りてわり
おわりまさしくりとおほけくそれ大し
奏 寓せてしはおてし間ませ今
紀名 沐なけすまたりふゐる紙よさき
こひてうむいつは弟みか

清和天皇鷹犬之遊漁猟之娯未嘗留意風姿甚端厳如神性
天慶三年五月八日入道素真四十年十二月四日山崩年卅一

このみかとはかほかたちよくおはしまして
ほとけの御名を御心にいれて御こゑは
いとたうとくて申給をきゝて女はいたう
なきけりかゝるきみにつかうまつらて
すくせつたなくかなしきこと
このおとこにほたされてとてなむ
なきけるかゝるほとに
みかときこしめしつけて
このおとこをはなかしつかはしてけれは

この女のいとこのみやすん所女をはまかてさせて
くらにこめてしほりたまうけれは
くらにこもりてなく

あまのかるもにすむゝしのわれからと
ねをこそなかめよをはうらみし
とてなきけれはこのおとこは人のくにより
よることにきつゝふえをいとおもしろく
ふきてこゑはをかしうてそあはれに

となむなきける かゝれはこの女はくら
にこもりなからそれにそあなるとは
きけとあひみるへきにもあらてなむ
ありける
さりともとおもふらむこそかなしけれ
あるにもあらぬ身をしらすして
とおもひをりおとこは女しあはねは
かくしありきつゝ人の国にありきて
かくうたふ
いたつらにゆきてはきぬるものゆへに
[illegible] 見まくほしさにいさなはれつゝ
水のおのみかとの時なるへし おほみやす
所もそめとのゝきさき也 五條のきさきとも
[illegible] 清和天皇[illegible]
[illegible]神性
むかしおとこつのくにゝしる所ありけるに
あにおとゝともたちひきゐてなにはの

ゆくになきさをみれは舟
とものあるをみて
なにはつをけさこそみつの浦ことに
後撰
これやこの世をうみわたる舟
これをあはれかりて人ゝかへりにけり
むかし男せうえうしに思ふとち
かいつらねていつみの国へきさらきはかり
にいきけりかうちのくにいこまの山
をみれはくもりみはれみたちゐる雲や
まずあさよりくもりてひるはれたり
雪いとしろう木のすゑにふりたり
それを見てかのゆく人の中にたゝひ
とりよみける
昨日けふ雲のたちまひかくろふは
花の林をうしとなりけり
むかし男和泉国へいきけり住吉の

けりすみよしの郡すみよしの浜をゆ
くにいとおもしろけれはおりゐつゝゆく
ある人すみよしのはまとよめといふ
鴈なきて菊の花さく秋はあれ　と
春のうみへにすみよしのはま
とよめりけれはみな人〳〵よます成にけり
むかしおとこ有けりそのおとこ伊勢の
くにゝかりのつかひにいきけるにかの伊
勢の斎宮なりける人のおやつねの使よ
りはこの人よくいたはれといひやれ
りけれはおやのことなりけれはいとねん
ころにいたはりけりあしたにはかりにいたして
やりゆふさりはかへりつゝそこにこさせけり
かくてねんころにいたつきけり二日といふよ
男われてあはむといふ女もはたいと
あはしともおもへらす

絶えて人のしのびて来たるを待ちわび
あはすはきえぬへきものとある人金はいひを
よをまちて女のもとへまいりたるかれ
ん女人とも川めて祝ふるかなしかりの
おとこのりもおきてかへりけるをとん
かの物かたりはこのことをみて
しての煙月のおほろなるふちに
さきまつてはへるまゝにて人来あ

おとこつとめていたくてさゝめかれい
つれなきわらはしみ川ませてあるま
涙をなかしまいらせてをりて思ひ
おとこつとめていかなくてこの女のもとへ
ほとなくてまことにかへりて人を遣る
みなそれはいてつまえあそひと
まへ行つきなほえてかへりけるきみの
本のお詞をたまへて

あやしく我やゆきあしたれはゆす
本　北かいかうてか袖てかかとてか
ねこひしくはこひまされある
かきそすいのやゆ宇ふりき
同　またてこそこしほとゞよ（一説よひと）
ここかをよりとりよりてる野はの
またけはいはき されたひしさよ金
川めそいとくあてもてまよの

これいつの世の事にかありけむ使
ありきこえひとよさけのこと名れ
ともけるあひとこそ見そての守はお
はりの国へこえにけりとすまひはこ
こゝ人寺ちのみこと左りせて
あをあそよやうくあ守しとすれ
かとふめてとかて年月のさよ
こことのきそて一りてそ八

かち人のわたれとぬれぬえにしあれは
とかきてすゑはなしそのさかつきのさ
らについまつのすみして歌のすゑ
をかきつく
又あふさかのせきはこえなん
とてあくれはおはりのくにへこえにけり
斎宮は水のをの御時文徳天皇の
御むすめこれたかのみこのいもうと

むかしおとこかりのつかひよりかへりき
けるにおほよとのわたりにやとりて斎宮
いつきの宮のわらはへにいひかけゝる
みるめかるかたやいつこそさほさして
秘大
我におしへよあまのつり舟
昔おとこ伊勢の斎宮に内の御使
にてまいれりけれはかの宮にすきこと
こといひける女わたくしことにて

よ
ちはやふる神のいかきもこえぬへし
松き 大宮人のみまくほしさに
かへし
こひしくはきてもみよかしちはやふる
神のいさむるみちならなくに
むかしおとこ伊勢の国なりける
女又えあはてとなりの国へいくとてい
みしううらみけれは女
我ま おほよとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへる浪かな
むかしそこにはありときけとせうそ
こをたにいふへくもあらぬ女のあたり
を思ける
万葉 めにはみて手にはとられぬ月のうちの
かつらのことききみにそ有ける
むかしおとこ女をいたううらみて

一万三十　いはねふみかさなる山はへたてねと（あらねとも）
拾遺　あはぬ日おほく恋わたるかな
むかしおとこ伊勢の国にゐていきてあらむと
いひけれは女
おほよとのはまにおふてふみるからに
心はなきぬかたらはねとも
といひてましてつれなかりけれは男
袖ぬれてあまのかりほす海の

みるをあふにてやまむとやする
女
いはまよりおふるみるめしつれなくは
潮ひしほみちかひもありなん
又おとこ
なみたにそぬれつゝしほる世の人の
つらき心はそてのしつくか
よにあふことかたき女になん

むかし二条のきさきのまだ春宮の
みやすむ所と申ける時うち神に詣
でたまひけるにこのゑづかさにさ
ぶらひけるおきな人々のろくたまはる
ついでに御車よりたまはりてよみて
たてまつりける

古今

おほはらやをしほの山もけふこそは
神世のことも思ひいづらめ

とて心にもかなしとやおもひけむいかゞ
おもひけむしらずかし

文徳天皇

昔田むらのみかどと申みかどおはしま

女御従四位下多賀幾子右大臣良相女嘉祥三年入内天安二年十一月十四日卒

しけりそのときの女御たかきこと申みまそ
かりけりそれうせたまひて

藤原多賀幾子従四位下右大臣良相女

安祥寺にてみわざしけり人々さゝげ

安祥寺五条后順子建立寺也

物たてまつりけりたてまつりあつめたる
ものちさゝげばかりありそこばく

さゝけものをきのえたにつけて堂
のまへにたてたれはやまもさらにた
うのまへにうこきいてたるやうになむ
みえけるそれを右大将にいまそかりける
常行 西三条右大臣良相一男 貞観六年正月十六日参議 八年十二月十六日大将 廿一
ふちはらのつねゆきと申すいまそかりて
かうのをはるほとにうたよむ人
ひとをめしあつめてけふのみわさを題
にて春のこゝろはへあるうたたてまつらせ

業平 貞観七年三月右馬頭 天安二年 女御 良相公女 何若後延喜元
給ふ右のむまのかみなりけるおきな
めはたかひなからよみける

山のみなうつりてけふにあふことは
はるのわかれをとふとなるへし

とよみたりけるをいまみれはよくもあらさりけり
けりそのかみはこれやまさりけむあはれかりけり
[illegible]
むかしたかきこと申女御おはしまして

申しけりなゝ七日のみわさ安
祥寺にてしけり右大将ふちはらの
つねゆきといふ人いまそかりけりその
みわさにまうてたまひてかへさに山
人康親王 仁明第四 四品弾正尹 号山科宮 貞観元年出家 同十四年薨 四十二
しなのせんしのみこおはしますその
山しなの宮にたきおとし水はしらせ
なとしておもしろくつくられたるに
まうてたまうてとしころよそには
つかうまつれとちかくはいまたつかうまつらす
こよひはこゝにさふらはむと申
たまふみこよろこひたまうてよるのおま
しのまうけせさせたまふさるにかの
大将いてゝたはかりたまふやう宮
つかへのはしめにたゝなほやはあるへき
貞観八年三月廿三日行幸右大臣良相百花亭
三条のおほみゆきせし時紀のくにの
ちさとのはまにありけるいとおもしろ
き石たてまつれりき

移りさいれはそゆきおいちゃてらわり
しかれはある人の兄はしかりしやまかの名そ
ますみかりしと志さしふかきさまを君
たりこのうしをそてまつるこゝろにふかさまひ
てみすつくんに移りしてかりまつりき
いくさなるそれてきぬこのうへ
きこしめしは人なとさはまてりこれとさ
毎まなそさうてすゝむるたちへしそ

人々はさこしせいちまふ右のむしきぬを
なりなる人のむきんかときこらけとき
はかそてまさ三のこゝにみこそけ
てそれからりなる御
わか孫よひとをおはるる文な
心ときせんよしのみけきいは
こらむしよありける御
むらくものたちをあしかれさまん

御うぶやに人々うたよみけり御おほぢかたなりけるおきなのよめる

わが門にちひろあるかげをうへつれば
　夏冬たれかかくれざるべき

これは貞数親王（清和第八　母中納言行平女　延喜十三年薨）時の人中将の子となむいひける あにの中納言ゆきひらのむすめのはらなり

むかしおとろへたる家にふぢの花うへたる人ありけりやよひのつごもりにその日あめそほふるに人のもとへおりてたてまつらすとてよめる

ぬれつゝぞしひておりつる年のうちに
　春はいくかもあらじとおもへば

昔左のおほいまうちぎみ（源融　嵯峨天皇十二源氏　母正五位下大原全子　貞観十四年八月廿五日任左大臣）いまそかりけりかも川のほとりに六条わたりに家をいとおもしろくつくりてすみ

まひるは弥生月のつこもりころさく
の花なりひらけたるよりも後ち
くさふかみゆかしなりけれたゝしさ
はなそしいこよきけのこゝろひく
よあやまれゆくはてまてわこのかたを
しろきともむらさきともいはれ
ゐるきぬたされつゝしきかの色さまよ
ひかりきえて人はこれをせけてく

しあは
春かすみいけのきしかなたさき（け）
はりするころ母ハ花てまうて春を
こゝろむ気色そらかくみていきさわ
やさるふあやしくなりける事こそろく
おほゆるはまみなと六千ちまての中
ふ春の海にいはかすにゐる所あり
ふとはまハうちかのたきぬはふるて

あそびてし夜のよへはろきすまえん

惟高文徳第一母名虎女従五上仁壽子四品号小野宮

むかしこれたかのみこと申すみこおはしま
しけり山崎のあなたにみなせといふ
所に宮ありけりとしことのさくらの
花のさかりにはそのみやへなむおはしま
しましけるその時右のむまのかみ
なりける人をつねにゐておはしましけり

時よへてひさしくなりにけれはその
人の名はわすれにけりかりはねんころに
もせてさけをのみのみつゝやまとうたに
かゝれりけりいまかりするかたのゝなき
さのいへその院のさくらことにおもしろ
しその木のもとにおりゐて枝をおりて
かさしにさしてかみなかしも
みなうたよみけりうまのかみなりける

人のもとへ
世中にをそれさうのありしなん
ものいひとめてすへかまし
こゝろもかくおはする人のこゝろ
ちまはに残てとはてはそへされ
しきまさなふひさうかるき
そこの来年のとはあらんてあまり日あれは
なりぬ此よなる人あけとあはせて

わかれて来年りこのふるさとをみてん
みそしまさ西をとりあわてあるのかた
ゆくすゑのよはけりまたむまれて
おはきさうみこのをさまひるか
そのとりてあさの川のはらわふ
ゆるを題にてきゝ見てさつきて
き地のとまりこれまでの馬なまて
てあそびつりける

古今
まりゝし雲のいつこに月やとらん
わさのかけとまれいふさかる
みな秋とつたくすしさまてぬし
えさもふかきのわりつ稀にさま
はなこさりわりうきつぬし

同
えにもせよてしきまゝたまれハ
あまりもせふわりとり出
かりてふまいもさましいよ地な所

またさけのゝ地ゝわたそわるものゝそこ
たひてかり出ましいえとする十二日月
よくれむもすきハの馬場のある

古今
あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにけていれすもあらなん
月そふけりとてきさのわりつ稀
ひらふも稀にいよ如そむ

俳諧
山のはたくい月いつると

むかしみなせにかよひ給ひしこれたかの
みこれいのかりしにおはしますともに馬
のかみなるおきなつかうまつれり日ころへて
宮にかへりたまうけり御をくりしてと
くいなむと思ふにおほみきたまひろく
たまはむとてつかはさゝりけりこの馬の
かみこゝろもとなかりて
翁 枕とて草ひきむすふこともせし
秋の夜とたにたのまれなくに
とよみける時はやよひのつこもりなりけり
みこおほとのこもらてあかし給
うてけりかくしつゝまうてつかうまつり
けるを思ひのほかに御くしおろし給うて 貞観十四年七月出家
てけりむ月におかみたてまつらむとて
をのにまうてたるにひえの山のふもとなれは
雪いとたかししひて御むろにまうてゝをかむ

まうてゝおかみたてまつるにつれ〳〵と
いとものかなしくておはしましけれは
やゝ久しくさふらひていにしへのことなと
おもひ出きこえけりさてもさふらひてしかなと
おもへとおほやけことゝもありけれは
えさふらはて夕暮にかへるとて
御返
忘 わすれては夢かとそおもふおもひきや
雪ふみわけて君を見むとは
とてなむなく〳〵きにける
むかし男ありけり身はいやしなから母なん宮
なりけるその母なかをかといふ所にすみ給ひ
けり子は京に宮つかへしけれはまうつと
しけれとしは〳〵えまうてすひとつ子に
さへありけれはいとかなしうし給ひけるに
伊登内親王貞観三年九月薨

志賀寺けれはふるさとゝてもすみかた
ありけるをきえたまれハ京にけり
おもひねさへ侍りしかわりなき
古今
いとしきまくはしきありけれ
いかゝこゝろへ地たえてよる
世中にふりぬるものハなかれ
同
永からんこの人のこゝさえ
むかしおもひ有ける人ハあはれなる
京の君わたしおもしさまて名にし月
まハりまそて名におもや京の空に
人志賀寺のつれつれ真まにてすきれ
わもわかれしたりて雨にて名なふりあ
まち君もつれ入人を暗せ
むけれなとのきをわかつはまりて山月
まことにらぞておほきさまひけ
やまさこゝにゆまへくすそひれる

まやまみや人こそひてゆきやすき
めかれぬほとに雪ふりて心有
おもへとも身をしはなれぬなりけり

古今

雪のはれの地をまへにする
こゝろそれをみてこそあはれ
くり西まつてむかしの里人ありなむ
むかしてとまりきにしとこそきゆとあひ
いつりなむとわくおやありなれたはくを
てりひたくやまふかみつてゆの
りまおもへしくをとやおもひえん
わとふとしてやわり守る

新古

今まてはこそ人は世の中のあさましと
とのうさかくこそものゝねきは
そやみもわれたとえてものひとまれ
ねなはかたひとまきそてたりたる
首かしこのまてむかしのこゝろあり

あしやのさとにしるよしゝていきてすみ
けりむかしのうたに
　あしのやのなたのしほやきいとまなみ
新六　つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそこの里をよみける
こゝをなむあしやのなたとはいひけるこの
をとこなまみやつかへしけれはそれをたより
にてゑふのすけともあつまりきにけり

このをとこのこのかみも衛府督なりけり
その家のまへの海のほとりにあそひあり
きていさこの山のかみにありといふ布
のひきのたきみにのほらんといひ
てのほりてみるにそのたき物より
ことなりなかさ二十丈ひろさ五丈はか
りなるいしのおもてにしらきぬにいは
をつゝめらんやうになんありける

たきのかみにわらふたのおほきさし
てさしいてたる石ありそのいしのうへ
にはしりかゝる水はせうかうしくりの
おほきさにてこほれおつそこなる人
にみなたきのうたよますかの衛府督まつ
よむ

新古　わかよをはけふかあすかとまつかひの
なみたのたきといつれたかけむ

あるしつきによむ
ぬきみたる人こそあるらししらたまの
まなくもちるか袖のせはきに
とよめりけれはかたへの人わらふことにや
ありけむこの哥にめてゝやみにけり
かへりくるみちとほくてうせにし宮内卿
もちよしか家のまへくるに日くれぬやとりの方を
みやれはあまのいさりする

大かたくみゆふ〳〵かうあまりなれたるとに
とも、我の所へ参らはやと
まうすむくまわるのこ大かた
このたびてなまゝてりきあなうの我みまを
つなせかされて左まてゝ承して〳〵それ
それ家のめみところてことなき
ましゆ従らはうひていゑのらは
かれきなぬきわうのなとなる

つきまかりてりしとをおもひていふかる
かけまうす事あり
まいりしの所まてまいりて候
おとこのふハありさ所のね
歌人の云そていあさましやせすや
むかしをおもへば袖ぬれとも
あらしをあつまりて月をながめてさわるな
のふひとり

古今
おほかたは月をもめてしこれそこの
つもれは人のおいとなるもの
むかしいやしからぬ男われよりはまさ
る人を思かけてとしへける
人しれす我こひしなはあちきなく
いつれの神になき名おほせん
むかしつれなき人をいかてと思わたりけれは
あはれとや思けんさらはあす
ものこしにてもといへりけるをかきり
なくうれしく又うたかはしかりけれは
おもしろかりける桜につけて
桜花けふこそかくもにほふとも
あなたのみかたあすのよのこと
といふ心はへもあるへし
むかし月日のゆくをさへなけく男
三月つこもりかたに

後撰
をとこ春のころあれぬ子あ日にし
ゆくまさはらへありけれは
むかしひさふきさきてわれしかり
せうとにとこまかせそへる
わすれくさあし小冊てうらひ
ゆきさうをも青人ゆかを
むかしをとこかいやくていと小さき
人を思けるをすませかき

わくきさ雨りやかりけむ中にて吾
おほかたおもひ思ふまひてある
あかねさすなにひゝすてまちはく
あらきさいやまなるかりゝなれ
むかしをとこありのことりやらん
昔をとこ有名いてかりけむ女男
すまひたりふそのちよそとこにけを
猪子さの中ありけるはこ海のよこ

ねど時々ものいひおこせけり女
かたにゑかく人なりければかきにや
れりけるをいまの男のものすとて
ひとひふつかおこせざりけりかの男
いとつらくおのがきこゆることをば今ま
でたまはねばことはりと思へど猶人
をばうらみつべきものになむありける
とてろうじてよみてやれりける時は

秋になむありければ
秋の夜は春日わするゝ物なれや
霞に霧や千へまさるらん
となむよめりける女返し
ちゞの秋ひとつの春にむかはめや
紅葉も花もともにこそちれ
むかし二条のきさいにつかうまつる男
ありけり女のつかうまつるをつねに見かはして

してよはひわたりけりいかてものこしに
たいめんしておほつかなくおもひつめたる
ことすこしはるかさむといひけれは
女いとしのひてものこしにあひにけり
ものかたりなとしておとこ

ひこ星にこひはまさりぬあまの川
へたつるせきを今はやめてよ

この歌にめてゝあひにけり

むかし男ありけり女をとかくいふこと月
日へにけれはいはきにしあらねは心くる
しとやおもひけんやう／＼あはれとおもひ
けりそのころみな月のもちはかりなり
けれは女身にかさひとつふたついてきにけり
女いひおこせたるいまはなにの
心もなし身にかさもひとつふたついてたり
時もいとあつしすこし秋風ふきたちなん

ちゝむこさゝなすあらぬほとにてなりけれは
相らうそむほとてかしこきなりけり
人のかくいふえにすなりそくち
そきまみえけるはこのさかせう
こにたるふか人まなかされ人なの
せのうそのたりけるとよのきせ
てこゝとえてきみけてとこせら
相のけてひしまゝとあそへよ

これもくるしくおもふより有けれ
はかなきことゝもにつけて人もとをせはこれ
とやまてそつかまへてのち何かあり
今日まで世をすぐるをやみむしはてゝ
やみぬるをいひて前と世をあかのたとこい
わさしけるそとぐちてきのうへを
心なきもてつゝあさ事人のせもうちて
こゝにたのやみむしはたか捨ぬかり

らむいまこそはみめとそいふなる

むかしほりかはのおほいまうちきみと（昭宣公基經 貞觀十四年八月廿五日右大臣 左大將 卅七）

申いまそかりけり四十の賀九條の

家にてせられける日中將なりける（業平十九ニ年任中將不審）

おきな

さくら花ちりかひくもれおいらくの

こむといふなる道まかふかに（忠仁公天安元年二月十九日太政大臣五十五 四月九日從一位 二十二年五月 攝政 准和）

昔おほきおほいまうちきみとき（外祖）

こゆるおはしけりつかうまつるおとこなか

月はかりにむめのつくり枝にきしをつけて

たてまつるとて

わかたのむ君かためにとおる花は

（古今）ときしもわかぬ物にそありける

とよみてたてまつりたりけれはいとかしこ

くをかしかりたまひてつかひにろく

たまへりけり

むかし右近の馬場のひをりの日むかひ
にたてたりける車に女のかほの下すた
れよりほのかにみえけれは中将
なりける男のよみてやりける

業平貞観六年三月右少将七年右馬頭十九年正月右中将

哥 みすもあらすみもせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかめくらさん
女

返 しるしらぬなにかあやなくわきていはん
おもひのみこそしるへなりけれ
のちはたれとしりにけり

むかし男後涼殿のはさまをわたりけれは
あるやむことなき人の御つほねより
わすれ草をしのふくさとやいふとて
いたさせ給へりけれはたまはりて
わすれ草おふる野へとはみるらめと
こはしのふなりのちもたのまん

むかし左兵衛督なりけるありはらの
行ひらといふありけりその人の家に
よきさけありときゝてうへにありける
藤原良近貞観十四年正月右中弁十六年時左中弁
左中弁藤原のまさちかといふをなむ
まらうとさねにてその日はあるしまうけ
したりけるなさけある人にてかめに
花をさせりその花の中にあやしき
ふちの花ありけり花のしなひ三尺
六寸はかりなむありけるそれを題に
てよむよみはてかたにあるしの
はらからなるあるしゝたまふと聞て
きたりけれはとらへてよませけるもとより
歌のことはしらさりけれはすまひけれと
しゐてよませけれはかくなむ

咲花の下にかくるゝ人をおほみ
ありしにまさるふちのかけかも

なかころとかやむかしのひめ君おはしまさ
おとこのかたはうけさらはにみまし候か
やそ藤氏のこうたいしんとよなり
てよこはきのおとゝとそ申けるか
らすたりふしき
むすめに有ける言はよ中将
姫と申せしと思はれけるあそん
御女のあまになりてよつの中にた

むして當麻寺と申けるみ堂
よりも見えけるりしつくにつゝきれいまて
て庵り寺
うちそ其てはのかみをたかね
らのけさちつ経よみはを
ごらむひやりある奉のおさめ
前おとこしてなりてきよきまとによ
まてわたるへきりたまふときくさ

つかうまつりける心あや
まりやしたりけむみこたちのつかひ
給ひける人をあひいへりけりさて
ねぬる夜の夢をはかなみまとろめは
いやはかなにもなりまさるかな
となむよみてやりけるさるうたの
きたなけさよ
むかしことなる事なくてあまになれる
人ありけりかたちをやつしたれとものや
ゆかしかりけむかもの祭見にいてたりける
をとこうたよみてやる
世をうみのあまとし人をみるからに
めくはせよともたのまるゝかな
これは斎宮の物見たまひける車に
かくきこえたりけれは見さしてかへり
給ひにけりとなむ

むかし男かくてハしぬへしといひやりた
りけれハ女
白露ハけなハけなゝむきえすとて
玉にぬくへき人もあらしを
といへりけれハいとなめしと思ひけれと心
さしハいやまさりけり
むかしをとこみこたちのせうえうし給
ふところにまうてゝたつたかはのほ
とりにて
古今 ちはやふる神代もきかすたつた川
からくれなゐに水くゝるとハ
むかしあてなる男ありけりその男
のもとなりける人を内記にありける
ふちはらのとしゆきといふ人よはひ
けりされとまたわかけれハふみもをさ〳〵
しからすことはもいひしらすいはむや哥

さしもはかなきれハかゝのあさなる人
わかよのきえゆく跡ハ露にきえて
まとひふかはかなくてたとへのある
はかなくのなかにはかなき河

古今
袖のそほちてむすひし水

逢まし命のたとへめくりて

わきみより袖ハひつゆかはらの月

月
あきふかきのきさゝいるはまのほん

こひしきれなたそいとゝくやさしく
まてはゆふかへこそつゆにぬれてありと
身をいまたかなたに行ととせわ
ここえおらのとはりのなかにかかりぬ
つきまつるむなしつゆのたとへさゝいるあ
らハこの命をはかなしといへりあきれまし
いのちをたとへめくりてよそやらす

月
かすくまつわかものおもひすてにけりとなる

かそはあかハ帰りうちにぬる
こゝろそやれりけれと君まてかよはす
あさてまてやまぬそまことにはけり
むかし女人の心をうらみて
風ふけはとはに浪こす岩なれや
わか衣手のかはくときなき
とつねのことくさにいひけるをきゝ
おひけるおとこ
よひことにかはつのあまたなく田には
水こそまされ雨はふらねと
むかしおとこともたちの人をうしなへる
かもとにやりける
花よりも人こそあたになりにけれ
古今 いつれをさきにこひんとかみし
昔おとこみそかにかよふ女ありけりそれか
もとよりこよひゆめになんみえ給ひつると

まひつるといへりけれはおとこ
おもひあまりいてにしたまのあるならん
よふかくみえはたまむすひせよ
むかし男やむことなきおんなのもとになく
なりにけるをとふらふやうにていひ
やりける
いにしへはありもやしけむいまそしる
まためぬ人をこふるものとは

かへし
したひものしるしとするもとけなくに
清輔
かたるかことはこひすそあるへき
又かへし
恋しとはさらにもいはし下ひもの
同
とけむを人はそれとしらなん
むかしおとこねんころにいひちきれる
女のことさまになりにけれは

すまのあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
むかしおとこやもめにてゐて
なかゝらぬ命のほとにわするゝは
いかにみしかき心なるらん
昔仁和のみかとせり河に行幸したまひ（芹川行幸　仁和二年十二月十四日）
ける時いまはさることにけなく思けれと
もとつきにける事なれは大鷹の
たかゝひにてさふらはせ給ひける
すりかり衣のたもとにかきつけゝる
（後撰）
おきなさひ人なとかめそかり衣
けふはかりとそたつもなくなる
おほやけの御けしきあしかりけり
おのかよはひを思ひけれとわかゝらぬ人は
きゝおひけりとや
むかしみちの国にておとこ女すみけり

はなとこゑへいつこにかくれけん
しらてむかしのけるむかしをとはせむ
かくれ我のかたみにおもへは
てさけのまゝそしる

古今
おきなのかせふきしよりさゝ
こゝろしまへのうら礼なくの
荷ねこすつよりまちの国まちま
こひつゝも京に思ふかひなき

百人一首 二十キ
浦ちかくふりくるゆきは白浪の
拾遺
すゑのまつやまこすかとそみる
たむけにはつゝりのたよりありとそみん
いかなりしゆゑ
すみよしの住吉の岸による浪
かな

古今
読人不知
我みてもひさしくなりぬ住よしの
きしのひめまついくよへぬらん

深草にすみ侍りてまかりて
　むかしとおはなの川のさの
新古　ひさしきせかいひさしきさ
むすひをくとをそもせてほた
いまたにもかゝりけるこそいつれかれい
　むかしまてあまさかまかなまた
古今　をみなへしはなにまた葉まて
菊女のかたなるかたとのつ見えて
みさかれるそのうきなとをそく
　えみえしか今はわすられにけり
古今　まてて時わかす風物代
むかし男女のまさしき事ともおはしける
人のもとりよふまてひてもさきて
てのちなくそへて
拾遺　近江なるはくさのくりそはせん
つまなき人のうらみむ

若やこ梅壺よりあめにぬれて人
のまかりいつるを見て
うくひすの花をぬふてふかさもかな
ぬるめる人にきせてかへさん
返し
鶯の花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさん
むかしおとこちきれることあやまれる人に

新古 やましろのゐてのたま水手にむすひ
たのみしかひもなきよなりけり
といひやれといらへもせす
むかしおとこありけり深草にすみける
女をやう〳〵あきかたにや思ひけむ
かゝる哥をよみけり
古今 年をへてすみこし里をいてゝいなは
いとゝ深くさ野とやなりなむ

若し

桜をみはつとなりそれたなさんそ

円　さりてはさりや八君八こそらむ

こしめり萌すまめてて桜もさそ苦

くなりまそう

むかしはをとつゝなを萌すまと苦す

脳おりていさあ脳

桜の車へいそてさてやこあ苦さ

我とひと来人へ付るハ

着物とまうひてゝいらしぬてく右道

守務大

古今

つゐにゆく道とハかねてきゝしかと

昨日今日とハおもはさりしを

本云
本定之説己自義也

合多本所用捨也不備證本
近代以狩使事為端之本、書来
末代仁之人々ニ蜜也更不可用之
此物語古人之説不同或稱在中
将之自書、或稱伊勢之筆作
就彼此有書落事等上古
之人強不可尋其作者只可翫

判者言葉而已
戸部尚書判
本云
以定家卿自筆本令校合
此抄本者書加畢

u 7024

俳諧しをり

特別
へ 12
4548

飛鳥井家庶流 中納言正三位雅康卿
二楽軒と号法名宗世 延徳七年薨
年六十九
書体飛鳥井流より一風を成し 二楽
軒流之称をもつて 和哥を能くせ